

調査研究活動報告

「堺大絵図」の修理・撮影・展示

The Restoration, Photographing, and Display of the *Grand Map of Sakai*
KOJIMA Michihiro

小島道裕

本共同研究「元禄『堺大絵図』に示された堺の都市構造に関する総合的研究」において、活動の一環として、本館蔵「元禄二年堺大絵図」（資料番号 H-115、全10枚）について、修理、撮影、および展示を行ったため、これについてまとめておきたい。

1 修理

「元禄二年堺大絵図」は、新たに見いだされた絵図として、1977年に前田書店より刊行されたもので、その後、文化庁の所蔵を経て、1981年4月14日（国立歴史民俗博物館が設置された法律上の日付）に、管理換えによって国立歴史民俗博物館の所蔵となっている。

その後、国立歴史民俗博物館においては、2007年の企画展示「西のみやこ 東のみやこ」で一部を展示するなどの利用はされてきたが、巨大であり、しかも10枚が1つの軸に重ねて巻かれているという、きわめて扱いにくい形状であるため、閲覧は容易でなく、保存上も好ましくない状態であった。

本共同研究においても、この絵図を詳細に検討するためには、高精細のデジタル撮影を行って、

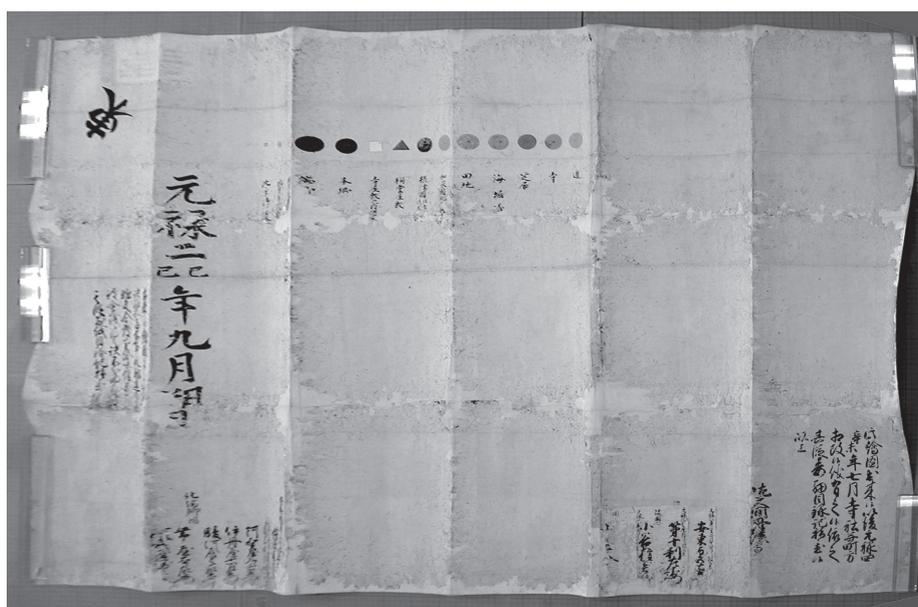


図1 修理前の状況。裏打ちが厚く、大きく波打っている。

データとして検討を行うことが効果的であると判断された。しかし、資料の状態は、表装の質が悪く、特に裏打ち紙に厚いものが使用されていたため、多くの「折れ」が生じ、激しく波打つ結果となっていた（図1）。このままの状態では平面性を保持することが困難で、撮影しても「折れ」による歪みの大きいものになってしまうことが明らかで、撮影よりも先に修理を行うことが必要、という結論に達した。そのため、館の資料補修経費と共同研究経費を合わせる形で、本格的な修復を行った。

修理は、(財)元興寺文化財研究所に委嘱し、2ヶ年に分けて行った。まず2010年度には、仕様の確定も兼ねて、比較的小さく、貼り重ねも少ない2点（H115-8, H-115-10）を対象とし、結果が良好であることを確認した上で、2011年に残りの8点（H-115-1～7, H-115-9）についても同様の方法で行った。

主な仕様は、下記のようなものである。

- ①処理前写真を撮影し、処理前の状態を記録する。
- ②必要に応じて彩色部分に膠水を塗布または噴霧し、にじみ止めと剥落止めを施す。
- ③加湿しながら旧裏打ち紙、旧肌裏紙、旧繕い紙を除去する。（図2 裏打ち紙の剥離）



図2 裏打ち紙の剥離

(修理作業についての図2～図6は元興寺文化財研究所提供)



図3 本紙の漉嵌



図4 貼り紙の貼り戻し

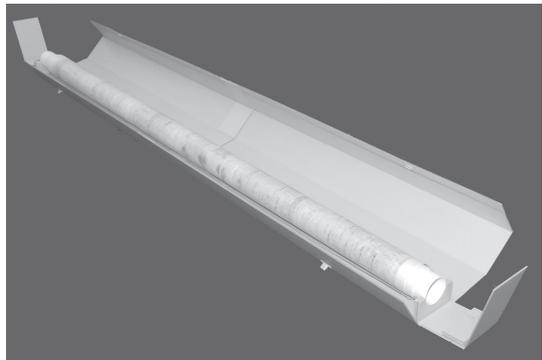


図5 中性紙の収納箱

- ④本紙の貼り紙・付箋を剥がす。
- ⑤必要に応じ、本紙の貼り合わせを剥離する。
- ⑥重なっている破片を元の位置に戻し、ずれている描線を修正する。
- ⑦本紙および貼り紙・付箋の裏側から、^{すきばめ}漉嵌法*で和紙繊維を補填する。(図3 本紙の漉嵌)
(*本紙の虫穴や欠損部分に、裏面から和紙繊維を分散させた溶液を流し込んで補填する修理方法)
- ⑧濾紙に挟んでプレスしながら自然乾燥させる。
- ⑨元通りに貼り継ぐ。
- ⑩貼り紙などを貼り戻す前に、本紙および貼り紙などのそれぞれを、4×5インチカラーフィルムで写真撮影を行う。
- ⑪貼り紙、付箋を元の位置に貼り戻す。下の部分が見えるように、めくれる状態で貼る。(図4 貼り紙の貼り戻し)
- ⑫中性紙製の巻軸(径7cmの筒)に巻く。
- ⑬中性紙ボードで箱(軸受け付き)を作成し、1点ずつ収納する。(図5 中性紙の収納箱)
- ⑭処理後写真を撮影し、修理報告書を作成する。

結果として、「折れ」は解消され、1点ずつ収納する形にしたため、取り扱いの便は大きく改善した。また、貼り紙をすべて下の部分が見えるようにめくれる形で貼ったことによって、各段階での状況を原本で確認できるようになった。

一方、貼り紙部分の取り扱いは難しくなり、また貼り重ねが多い部分は、全体的に裏打ちを薄くしたこともあって、厚みが相当異なることとなった。この他、ずれていた描線の位置を合わせるために本紙に歪みが生じた場合もあり、中性紙軸に巻く際には、ゆるめに巻き付けるなどの注意が必要になっている。

なお、今回の修理によって、絵図に描かれた大仙陵(いわゆる仁徳天皇陵)は、実は貼り紙であって、当初は描かれていなかったことがわかった。実際には絵図の範囲からはみ出してしまうこの陵墓をあえて貼り紙で入れたのは、何時であり何故なのか、修復によって生じた新たな謎である。

2 撮影

(1) 修復時の撮影

上記修復の際、貼り紙・付箋類をすべてはずした、すなわち絵図の制作当初の状態での4×5カラーポジによる撮影を行った。

また、外した貼り紙・付箋類についても、4×5カラーポジによる撮影を行った。(図6 取り外した貼り紙・付箋類(H-115-6の一部))

(以上の撮影は、元興寺文化財研究所による。)

(2) 修復後の撮影

修復納品後、国立歴史民俗博物館において、高精細のデジタル撮影を行った(撮影は2012年7月11日。撮影者は記録担当専門員勝田徹)。機材は、8000万画素のデジタルバッグを用い、付箋の最

も細かい文字まで判読できることを確認して撮影している。

問題となったのは、貼り紙・付箋類の処理で、いったんそれらの表面が見える状態で撮影した後、すべてめくって、ガラス製のおはじきやプレパラートを置き、下に書かれた文字などが見えるようにして撮影した(図7)。たとえば、H-115-6の戎島付近は、まず1ヶ所付箋が貼られ、その後大きく2回貼り紙がなされているため、計4回同じ場所を撮影している(図8-1～4)。絵図の変遷を理解することが可能である。

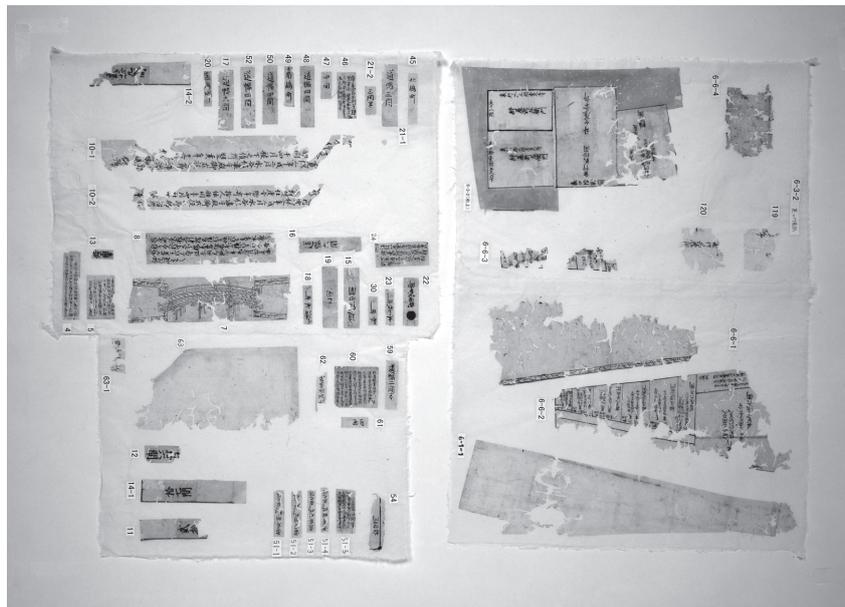


図6 取り外した貼り紙・付箋類(H-115-6の一部)



図7 撮影時の貼り紙・付箋類の処理



①



②



③



④

図8 四重に紙が重なった戎島付近の撮影

3 展示

修復と撮影を受けて、絵図を公開し、また共同研究の成果発表のひとつとして、特集展示「元禄の堺大絵図—巨大都市図を歩く—」を開催した。会場は、国立歴史民俗博物館の総合展示第3展示室（近世）内の特集展示室を使用し、会期は、2012年12月18日（火）～2013年1月27日（日）であった。

目玉の1つは、床全面に貼りだした、約6×10mにもなる原寸大絵図の写真シールで、絵図の上を歩きながら見ていくことができる、文字通りの「巨大都市図を歩く」展示であった（図9）。貼り紙・付箋類を取り外した状態の写真を用いたため、当初の姿が初めて公開されたことにもなった。この写真は、解説シートにも掲載して、印刷物としても提供した（図10）。

実物の絵図も当然展示した。対象としては、展示ケースに最大限入る5枚（H-115-5,6,7,8,9）を選んだ。1枚が1辺2mを超えるほどの大きな絵図であり、また貼り紙などが多いため、展示方法にも工夫し、鉄板の上にフェルトを貼った斜台を新たに制作して、それに磁石で貼り付ける方法を取った（図11）。

この他の実物資料としては、館蔵資料から、「Sacay（堺）」の記載がある「テイセラ日本図」（1595年、銅版手彩色）、「和泉名所図会」（寛政8年<1796>刊行）、「嘉永改正堺大絵図」（嘉永4年<1851>版、木版色刷）、「嘉永改正堺大絵図」（文久3年<1863>版、木版色刷）を展示した。

また、パネルによって、空中写真による当時の海岸線、発掘による遺構の分布状況、寺院や山口家住宅、清学院（山伏・寺子屋）などの現存する建物との関係、絵図の当初の状態と現状の違い、などについて示し（図12）、iPadを用いたコンテンツ「今の堺、昔の堺」を制作して、現代の地図と「元禄二年堺大絵図」を重ね合わせる試みを行った（図13）。



図9 床に原寸大シールが貼られた展示室

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館

総合展示第3室 特集展示
「もの」からみる近世

元禄の堺大絵図

—巨大都市圏を歩く—

2012年12月18日(火)~2013年1月27日(日)

大阪府堺市堺区の堺は、戦国期から近世前期にかけて日明貿易や朱印船貿易の拠点となり、会合により自治的に運営されるなど、輝かしい歴史の舞台となりました。江戸幕府の意向により1615年大坂夏の陣で焼かれた後、新たに掘り直された溝で囲まれた内部は、戦国期とは異なった新たな街区が作られました。国内市場の中心とされた大坂から西南方、和歌山を目指す紀州街道（大造筋）がほぼ南北に走り、それに直交する大小路が東西を画して、摂津国と和泉国との国境にもなっています。南北約3km、東西約1kmのほぼ長方形をなす堺について、本館に所蔵されている元禄二年（1689）『堺大絵図』は、土地所有の単位としての1筆レベルに至るまで詳細に描いています。その基本は現状にほぼ踏襲されている一方で、文献史料は意外に少なく、地中に眠った戦国期を復原する課題にとって、発掘調査に基づく考古学的な手法は重要です。堺の環濠内の「堺環濠都市遺跡」における発掘件数が多数に及んだ現時点で、同絵図に注目し、共同研究「元禄『堺大絵図』に示された堺の都市構造に関する総合的研究」を立ち上げました。その3年間におわたる成果を本特集展示で披露します。

【写真1】町屋の土地区画と山口家住宅
絵図で横線のように見えるのは、都市としての堺を構成する要素である土地区画であり、1区画毎に描かれている。縮尺は約300分の1であり(右ページ左下、方位標のスケールを参照)、絵図に表現された土地区画の1例として、絵図4にある「山口家住宅」を取り上げる。その住宅が建つ元の敷地は、絵図の写真で赤枠の部分に当たり、山口家の屋号である「越前屋」の名が示されている。建築史学の観点から同住宅を観察すると、近世初期に建造された後、中期から後期にかけての増改築を都度と考えられており、絵図に載せられた基本形をとりながら、北の区画(写真裏では右方向)まで進出したのである。後の区画については、上部の道に順って「表治間」とあるが、右側は虫食いとなっている。北へ進むと、入船三間入六間の区画に分かれていることから、虫食いの部分には「入船九間」と記されていたことがわかる。また、「入」は入船行を指す。

【写真2】大和川の付け替えに関する対応
大和川が堺の北で大阪湾に出るよう、付け替えられたのは、1704年である。1689年に作成された本絵図では張り紙で対応している。

【写真3】環濠
周囲を取り巻いた環濠のうち、南部分、東部分は、阪神高速道路環濠の建設時に埋められてしまったが、南は、今も残されている。濠から右下の区画は南宗寺で、建物が他の街区とは違った方向をとり、ほぼ正南北になっているのは現状と同じである。

【写真4】環濠が穿たれた西部の唐津地区では、1664年に降おして沈没が起きたと伝えられている。その周辺に張り紙が多い。環濠内では、写真とは別に記入したとしても、大阪湾では時計回りに南瀬があり、奥は一部の環濠と見て所蔵である。環濠が1659年に突如消失して現れたという説の真実性も明らかで、1704年に大和川が堺の北に付け替えられた結果、川口が崩壊したようになつた大瀬の土地は、環濠が埋められて南に下り、沈没の周辺に埋め、海岸線は変化した。その変化に対応しようとして、一筆の張り紙が用いられたのである。それ以降、堺は土地の問題に悩まされ、何度も修築を重ね、堺の町も衰退していく。

【写真5】大仙陵
いわゆる仁徳天皇陵である。元禄二年の作成当初には描かれておらず、張り紙で対応している。実際には張り紙の位置よりもう少し外側で、絵図の範囲外にはみ出る。敷いて張り紙で入れたのは、いつで、何故なのか、世界文化遺産への登録を狙っている現代とは違ふ、どのような事情があったのか、謎に包まれている。

第3展示室 特集展示 「もの」からみる近世
和宮ゆかりの難かざり
2013年2月13日(水)~3月31日(日)

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館
NATIONAL MUSEUM OF JAPANESE HISTORY
〒585-8502 千葉県鎌倉市城内町117番地 TEL 043-456-0123
お問い合わせは 入館予約係 03-5777-3833
お申し込みはホームページ http://www.nhk.ac.jp

発行日：2012年12月18日

堺大絵図

元禄二年(1689)『堺大絵図』の縮尺は約300分の1で、短辺でも4mを優に超す巨大で、10枚に分かれる。本絵図をデジタル撮影する前提となる平面を確保するために修理を施した。発掘して1615年の礎土層が確認された場合、それより下は、戦国期の遺構である。その位置関係と、本絵図のデジタル画像を詳細に比較することによって、周囲の遺跡とともに新たに区画し直された近世以降の都市プランとの関わりから、戦国期の確定を進める基盤となろう。ここに示されているのは、絵図上の張り紙を取り出した状態で、展示では床に提示している。張り紙に付された年次から判断すると、数十年間は実際に使用され続けられたらしい。うち5枚は、張り紙が付された状況を展示ケースで観察できる。

図10 特集展示の解説シート

147



図11 絵図原本の展示状況



図12 解説パネル



図13 iPadを用いたコンテンツ「今の堺、昔の堺」
(制作は共同研究員の高屋麻里子氏が担当)

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2016年1月25日受付, 2016年3月29日審査終了)